

機関番号 : 16301

研究種目 : 若手研究 (B)

研究期間 : 2007-2010

課題番号 : 19720023

研究課題名 (和文) 不定形音楽の理念の成立過程とその現代的意義に関する研究

研究課題名 (英文) The concept of musique informelle:

its historical development and its contemporary significance

研究代表者

高安 啓介 (Takayasu Keisuke)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号 : 70346659

研究成果の概要 (和文) : アドルノが 1961 年にダルムシュタットでの講演でうちだした不定形音楽の理念は、芸術音楽としての前衛音楽の在りかたを示唆するものとして、今日の作曲にも大いに示唆をあたえるところがある。一方において、アドルノのいう不定形音楽は、芸術音楽にとどまる。すなわち、構成と表現という二面において努力するとともに、作品として豊かな形式と内容をもつことを目指す。他方において、不定形音楽は、前衛音楽の精神をあらわすものである。すなわち、自由な構成によって、自由な表現をなしとげるとともに、自由な形式のうちに、真理内容とよばれるものを含んでいる。このことは、次のように根拠づけられる。作曲家は、素材にたいして決まった形式をあたえないならば、素材の働きかけに応じながら素材をあつかうだろう。こうして、素材のなかから形式が引き出される。このかぎり、引き出された形式は、作曲家の意図を超えたものであって、何らかの真理がそこに含まれることが期待される。

研究成果の概要 (英文) : The concept of musique informelle, which Adorno introduced in his lecture in Darmstadt in 1961, suggested ways to develop avant-garde music as art music, and this concept remains an instructive concept for contemporary composition. On the one hand, Adorno's notion of musique informelle maintains the core requirements for art music, i.e., striving for a high level of construction and expression, in order to realize an artwork with fully developed form and content. On the other hand, musique informelle represents the essential motivation of avant-garde music: free music that seeks free construction as well as free expression, not restricted by convention, and not externally controlled. Literally, the form of this music is "informal" in the sense that it does not obey any given schematic form. This informal form is also expected to include an intrinsic truth in its content. This criterion is based on the following model of music production. If the composer does not give the music materials any prepared form, the composer must handle the materials by following their tendencies. Thus, the music's form is found in the very core of its material. The form revealed is, therefore, far beyond the composer's intention, and this form can be expected to include some objective content.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	300,000	0	300,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	200,000	60,000	260,000
2010 年度	200,000	60,000	260,000
総計	1,200,000	270,000	1,470,000

研究分野：美学・芸術学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：アドルノ、前衛、現代音楽、美学、音楽史

1. 研究開始当初の背景

(1) アドルノは、新ヴィーン楽派に傾倒していたために、前衛音楽の支持者として知られるが、第二次大戦後にアドルノがどのように同時代の音楽とかかわっていたかについては、日本では詳しく研究がなされていかなかった。このところが解明されれば、アドルノ研究にとっても、20世紀音楽史にとっても資するところが大きいと思われる。

(2) 芸術音楽としての前衛音楽は、21世紀に入っても、制度に守られながら低調のままである。前衛音楽は、音楽の専門家のあいだの関心事にあまんじている。前衛音楽それ自体、どんなに最近のものであっても、どんなに斬新なものであっても、古き良きモダニズムの遺物と感ぜられる。そこで、前衛音楽のありかたについて根本から反省をうながす議論が必要とされていた。

2. 研究の目的

(1) アドルノが1961年に不定形音楽の理念をかかげるまでの歴史背景を明らかにする。とくに戦後ダルムシュタットの夏期講座でのアドルノの活動について明らかにする。

(2) 1970年代以降、不定形音楽の在りかたを示唆する例として、ヘルムート・ラッヘンマンの音楽について検討をおこなう。

(3) 日本における芸術音楽の展開をふまえながら、不定形音楽の理念がどれほど有効であるかについて考察する。

(4) 現代の文化状況のなかで不定形音楽の持つ意味について考察する。

3. 研究の方法

(1) ダルムシュタット国際新音楽夏期講座の紀要雑誌である *Darmstädter Beiträge zur Neuen Musik Bände 1-20* を精査し、研究構想にとって重要な箇所を洗い出す。ダルムシュタットの夏期講座に関する資料をさらに収集し、アドルノがそこで果たした役割を詳しく調べる。

(2) 2010年8月から翌年2月まで、ハイデルベルク大学の高等研究クラスターのアジア研究プロジェクトに参加し、このプロジェクトのテーマを共有することで、グローバルな文脈における「芸術音楽」「前衛音楽」「不定形音楽」の意味について理解を深める。

The Cluster of Excellence, Asia and Europe in a Global Context: Shifting Asymmetries in Cultural Flow. B2 Creative Dissonances: Music in a Global Context

4. 研究成果

研究の目的の(1)から(4)に対応して、以下の成果を得た。

(1) 第2次大戦後ドイツのダルムシュタットで開かれた「国際新音楽夏期講座」は、シュタイネッケの主導のもと、前衛音楽の発展に大きな役割を果たした。私はドイツのダルムシュタット国際音楽研究所にて、シュタイネッケとアドルノの往復書簡がまとめて保管されていることを確認した。1950年以来、二人は協力関係にあったが、1958年頃から両者は疎遠になっていたことがうかがえる。アドルノは1958年から1960年までの3年間は、ダルムシュタットの夏期講座に参加していない。一因として、シュタイネッケは当時の若手の試みを後押ししたいと考えていたのに対して、アドルノは若手が進めていたセリー音楽をよく思っていなかったことが考えられる。この報復書簡をより精密に検証することで、50年代の音楽状況の一端を明らかにできるだろう。

(2) 2009年に東京オペラシティの「コンポージウム」でラッヘンマンの特集が組まれた際、プログラム冊子のためにラッヘンマンの音楽の解説を書く機会を得た。私はこの文章でラッヘンマンの音楽を特徴づけるなかで、不定形音楽の本質にふれるところを指摘した。小論であるが、重要な論点を明らかにすることができた。

(3) 2010年8月から2011年2月までハイデルベルク大学の音楽研究プロジェクトに参加した。そこでの課題は、ヨーロッパに端を発するところの音楽が、アジアにおいてどのように受容されて独自のものになっていったかを考察することであった。そこで強く意識することになったのは、西洋の前衛音楽が、

非西洋の文脈においておいては、伝統音楽を見直すひとつのきっかけとなってきたことである。ハイデルベルクでおこなった講演では、以上の文脈を明らかにした上で、アドルノの不定形音楽の理念をあえて非西洋の文脈のなかにおきいれてみる考えを提示した。

(4) 現代において、不定形音楽が次のような意味をもつということが、一連の研究をとおして明らかになった。

不定形音楽の理念が、芸術音楽の伝統のなかにあると言えるのは、構成と表現という二つの要求をなお維持しているからである。すなわち、芸術音楽の伝統においては、グレゴリオ聖歌からセリー音楽にいたるまで、音楽の構成の度を上げていこうとする努力がなされてきたが、不定形音楽もまたそうした努力を怠らない。さらにまた、芸術音楽の伝統においては、バロックから表現主義にかけて、表現の度を上げていこうとする衝動がみとめられるが、不定形音楽もまたそうした衝動を失っていない。そして、芸術音楽の伝統においてそうであったように、構成と表現という二つの要求は、形式と内容という二つの要求ともつながっている。そのところでは、不定形音楽は、伝統をよく引き継いでいる。しかしまた、不定形音楽は、前衛音楽の精神を引き継ぎながら、前衛音楽のもつ意味を明らかにするものでもある。すなわち、不定形音楽は、自由でしばられない構成によって、自由でとらわれない表現をなしとげようとする。したがってそこでは、自由の意味が問われることになる。

西洋の芸術音楽は、音楽理論とともに特別な発展をとげてきた。西洋の芸術音楽は、理論によって自己反省をうながされ、理論によって次世代へと継承され、理論によって次なる発展へと向かうことができた。西洋の芸術音楽は、音楽理論なしには、高度に作り上げられたものという性格を持ちえなかったであろう。そもそも、音楽理論が、和声学のように音楽の規則を教えるものならば、自由な音楽のための理論というのも、自由な形式のための理論というのも、それ自体において矛盾している。はたして、規則からの自由を説くという音楽理論は、本当に在りうるのだろうか。こう問うならば、不定形音楽についての論は、まぎれもなく、自由な音楽のための理論であった。このとき、アドルノがつねにそう考えようとしたように、理論という語をその語源であるテオリアの意味でとらえるならば、自由な音楽についての自由な思索として、アドルノの本意に近いものとなるだろう。いずれにしても、アドルノがそこで問うたのは、芸術音楽としての前衛音楽について、そ

れがとくに自由を志向するものであるはずなのに、自由を享受してこなかったのはなぜかということだった。そしてその問いから、不定形音楽の理念がまさに自由な音楽をしめす理念として提起された。

不定形音楽について論のなかには、認識と生成についての論が、分けられぬかたちで含まれている。アドルノの論がとくに注目すべきであるのは、音楽理論にとどまらない深みを持つからである。混沌にたいして秩序をあてがうのでなく、混沌のなかから秩序がもたらされること、素材のうえに形式をあてがうのでなく、素材のなかから形式がもたらされることは、認識と生成の一つのモデルとして興味深いものである。その説明のなかには、自然支配による自然模倣というパラドクスとともに、自然支配による自然支配の克服というユートピアが入り込んでいる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 3 件)

(1) 高安啓介「アドルノの講演「不定形音楽に向けて」への注釈」、『愛媛大学法文学部論集人文学科編』30号, 155-175, 2011.

http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/bitstream/iyokan/427/1/AN10579404_2011_30-07.pdf

(2) 高安啓介「グローバルな文脈における芸術音楽」、『人文学論叢』(愛媛大学人文学会)12号, 11-22, 2010.

(3) 高安啓介「アウシュヴィッツ以後の芸術」、『愛媛大学法文学部論集人文学科編』29号, 101-115, 2010.

http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/bitstream/iyokan/414/1/AN10579404_2010_29-04.pdf

[学会発表] (計 1 件)

(1) 発表者 Keisuke Takayasu. 題目 Art Music in the Japanese Context: On the Dialectics of the Traditional and the Avant-garde. 学会 Asia and Europe in a Global Context: Shifting Asymmetries in Cultural Flows, at Heidelberg University. 日時 February 3rd, 2011.

<http://www.asia-europe.uni-heidelberg.de/en/research/b-public-spheres/b2/activities-and-events.html>

〔図書〕（計1件）

(1) 共著：高安啓介ほか『芸術はどこから来てどこへ行くのか』晃洋書房，2009（高安執筆箇所「音楽の仮象性格」319-333）。

〔その他〕（計1件）

(1) 高安啓介「ラッヘンマンの音楽」、『コンポージアム 2009 プログラム』（東京オペラシティ文化財団），19-21。

6. 研究組織

(1)研究代表者

高安 啓介

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：70346659